



第 1195 回例会報告

平成 22 年 10 月 14 日(木) 晴

会長挨拶

会長 長崎政直

老いの入口で、老いるということを考える

私も、おかげさまで、老いの入口 65 歳を過ぎました。これまで、老いてどう生きるかなど考えずに生きてきました。なかなか老いを自覚する事は難しいことだと思うこの頃ですが、少し老いについて考えて見ました。

紀元前 106 年生まれの古代ローマに、哲学者で政治家のキケロという人がいました。そのキケロが、老いについて書いているそうです。

老いは誰にも一様に訪れるが、「老い」を、「一生の中で意味あるもの」として位置づけるには、何よりも主体的な意思と生き方が問われねばならない。老いを良く生きるための不可欠の要素は「諸々の徳を身につけ実践すること」なのであると。

また、「老年が惨めなものと思われる理由」を、四つあげて、それに対する考え方に従えば、老いることが惨めには決してならないとも言っているそうです。

1. 「老年は公の活動から人を遠ざけるから」惨めだ。キケロは言います。「思慮と理性と見識を用いる仕事」は、むしろ老年こそが推し進められるものだ。「思慮・理性・権威・見識・・・それらの能力は老いによって奪い取られるものではない」。

2. 「老年は肉体を弱くするから」惨めだ。確かにこの自覚は私たちに強く在ります。しかし、キケロはこう言います。なにをするにしても体力に応じて行えば良いのである。それに、老年に体力は要求もされない。むしろ恐れるべきは、肉体の衰えではなく精神の怠惰である。年齢によりかかって、自らの怠惰を許容する、年齢を言い分けにする態度が良くない。常に、この精神の戦場で挑戦しなければならない。

3. 「老年は、ほとんど全ての快樂を奪い去るから」惨めだ。快樂ですが、衣食住については、あるもので満足できますし、色の道では、欲望を掻き立てら

れることもありません。キケロは言います。若い日々が悪徳の源となった快樂から開放されるのは、老年に与えられた贈り物だ。理性と智慧によってでは快樂を退けることが困難であったものが、自ずからそれを避けるようにしてくれることは、むしろありがたい。

4. 「老年は死から遠く離れていないから」惨めだ。キケロは言います。死は若い者にも、老いた者にも等しく訪れる。老人ばかりが問題にされるべきではない。「老いて死ぬことほど自然なことはない。存分に豊かに生きてきたとの力強い自覚と自負があれば、決して惨めではない。」というのです。

今日、高齢者福祉（老人福祉）の課題が、様々に言われています。それは、考えてみると、どんなサービスを社会から受けられるか、それは公平か、その負担は大変だという社会にとっての課題に焦点があり、老いの時を如何に主体的に生き続けるかという個人の生き方の課題が、疎かになっているかなとも思います。

以前、林洋三さんが会長挨拶の中で、心身を鍛え、学習し、体験を積む（学生期）→職につき、結婚し、家庭を作り、子供を育てる（家住期）→人が本来なすべきことや、自分が本当にやりたいことをする（林住期）→自分を見極める（遊行期）こうした人生の歩み中の、林住期を楽しんでいるという話をされました。

まさに、人生は、そうした続きものだと思います。老いるということは、自然のことであり、経験や学

■ニコニコ BOX

21名	24,000円
累計	429,000円
目標額	130万円
達成率	33.0%

■今週のことば

月岡ケアサービス小林保美様、本日はよろしくお願ひいたします。

長崎政直

■出席報告

会員数	35名
出席対象	35名
出席者数	27名
出席率	77.1%
前回修正	85.7%

■次回のプログラム

10月28日
ガバナ補佐事前訪問
クラブ協議会



習によって得た〈思慮〉〈理性〉〈見識〉といった「知」によって、十分に光り輝き、楽しく過すことのできる時期なのだと思うのです。「知の力」をもって、主体的に行き続けること、諸々の徳を实践することが、私達、老年の入口にあるもの、真っ只中にあるものにとって良い人生の過ごし方であり、まだ家住期・壮年期にある皆さんも、そんな老年期を迎えるために今から心の準備するのが良いのかもしれない。

本日のご講演に対して、いささか頓珍漢な挨拶であったかもしれませんが、会長挨拶とします。

◇幹事報告◇

1. 以下の文書を受領いたしました。

- ①ウィークリー(諏訪 RC・富士見 RC)
- ②2009-2010 年次報告書 RI2600 地区 (全員に配布致しました。)

2. 連絡事項

- ①下諏訪ボランティア連絡協議会『おつかれさま！しもすわ！！「御柱曳行路清掃」』11月2日(火)開催のお知らせが届きました。クラブとしての対応はしません。各自にてご協力下さい。
- ②(福)この街福祉会(この街学園)製造クッキーを会員の結婚記念月祝い品として贈呈致しました。年度末まで同様な対応を継続します。
- ③11月12日～16日国際奉仕委員会担当にてセブ島を訪問します。贈呈する古着(Tシャツ・ポロシャツ)の回収を継続しますので御協力下さい。
- ④10月9日～10日ライラ in 上田に蒲地・御子柴の2名が参加致しました。基調講演「大人が変われば世界が変わる」に感動してきました。
- ⑤11月6日～7日 RI2600 地区大会の参加調査表の提出を宜しく申し上げます。
- ⑥「次期役員及び理事候補者を選考する指名委員」が発表され「指名委員会」が発足いたしました。委員は次のとおりです。【長崎政直(委員長):松澤康夫:三村昌暉:高林一紀:小林聖仁:林洋三:小松孝弘:渡辺芳紀】(敬称略)

1195回例会 外部講師卓話

「介護の最前線」

社会奉仕委員会
今年度社会奉仕委員会のテーマのひとつである「社会福祉の現状研究について」の一環として(有)月岡ケアサービス代表 ケアマネージャー小林保美氏をお迎えしての講師例会を開催しました。

小林保美さんは、富士見町ご出身。諏訪清陵高校を約60年前に卒業し関西の大学で学び、その後、商社のトーマンの社員として頑張っているとき、ある

機会に介護ということに出会い、一念発起して横浜の福祉協会に入られました。

新潟県の、西蒲原病院にて介護事業の責任者を任されてその間、種々の資格を取得されました。

月岡温泉の月岡で介護事業として始めたので月岡ケアサービスとなったとのこと。諏訪に戻って8年になります。現在は、居宅介護・訪問介護・居宅生活支援事業所の有限会社月岡ケアサービス代表者として、またケアマネージャーとして、また時にはヘルパー養成学校長として八面六背の大活躍中であります。

まずお話し頂いたのは、この圏域6市町村で20万8千人いる中で65歳以上の高齢者は25%で65歳

以下の者が4名で一人の高齢者を支えているという。今後は益々高齢者は増え続けるであろうと言う話からスタートしました。

驚くべきは、下諏訪町の場合は、人口22,145人中3分の1の6,590人が高齢者で31.4%に当ります。3人で一人を見る計算です。次いで諏訪市・岡谷市・富士見・原村・茅野市となり茅野市であっても人口57,209人に対して17,708人が65歳以上で4人で一人を支える標準値となっています。

また、この圏域には特別養護老人ホームが13箇所あり757人が入所できますが、何処も待機でいっぱいだそうです。平成20年には特養で168人が亡くなって繰り上がりで入所できるはずですが、入所者希望者が多く実際には希望者の3分の1でいどしか入所できないのが現状だそうです。

入所者の中には認知症も多く、自分でお財布をしまってしまったのに財布がなくなった、盗まれたと事件に発展する事もある。他にも俳諧・妄想といった高齢者の定番的なことが介護をするに当たって大変であるとお話しを頂きました。



印象に残った事では「人は死から誰もが逃れる事はできない。1分1秒死に向かって進んでいるのだ…」という言葉でした。

だからこそ「元気な私達が介護の現状を知りどのように関わっていくか考えなくては行けない」と、改めて考えさせられる良い機会の例会となりました。